

会長就任にあたって

三 好 俊 吉



(略 歴)

昭和 26 年 3 月 東京大学第一工学部冶金学科卒
 昭和 50 年 7 月 日本鋼管株式会社 福山製鉄所製鋼部長
 昭和 57 年 6 月 日本鋼管株式会社 取締役就任
 第二重工本部 製鉄エンジニアリング部長委嘱
 昭和 60 年 6 月 日本鋼管株式会社 常務取締役就任
 福山製鉄所長委嘱
 昭和 63 年 6 月 代表取締役専務取締役就任
 新材料事業部長委嘱
 平成 2 年 6 月 代表取締役副社長就任

(主な業績)

製鋼技術の進歩、発展
 純酸素上吹転炉法の基礎技術確立
 スラブ連続铸造における安定铸造技術と軽圧下による内質改善
 海外鉄鋼業への協力、製鉄所の合理的運営。

(受 賞)

本会渡辺義介記念賞、香村賞

このたび、私は第 77 回通常総会の場におきまして新しく本会会長に選任されました。これは私にとりまして身に余る光栄と存じますと同時に、本会の輝かしい伝統を思いその将来の展望を考えると、責務の重大さに身のひきしまる思いをつのらせております。浅学非才ではありますが、誠心誠意、事あたり本会のさらなる発展に尽くしたいと念願している次第であります。

本会は創立以来 77 年目を迎え、会員各位の不断の学究と、歴代の会長、役員各位の多大のご尽力により、目覚ましい発展を遂げてまいりました。またこれは我が国鉄鋼業の振興に寄与する責務を充分に果たして来ており、戦後の諸外国から技術導入を行っていた頃に比べれば、今日の成長ぶりは隔世の感があります。

さて皆様御高承のごとく近年地球環境問題が大きくクローズアップされ、「地球にやさしい鉄づくり」が必要とされております。CO₂等の排出がもたらす地球の温暖化により、異常気象が発生したり、SO_x等の排出による酸性雨で森林、湖沼が汚染されて生態系に影響を与える等、人類の生存にかかわる重大な問題に我々は直面しております。これらは地球的規模で取り組むべき問題であり、経済の発展と環境保全とを両立させることによってその社会的使命を果たさねばなりません。

我が国における鉄鋼業の CO₂ 排出率は 12.9% にのぼり地球環境とのより一層の調和が課題であります。今こそ中長期的な見地に立ち、本会の設立理念を新たに認識し、産官学が一体となり、英知を結集させる必要の時期と思われまます。すでに基礎研究会において「鉄鋼業における炭酸ガス抑制対策研究会」が昨年度より活動をはじめておりますが、今後具体的な対策技術の研究についても個別のテーマを検討してゆきたいと思ひます。この為の平成 5 年度の研究テーマの応募を期待するものであります。

地球環境問題に関連したもう一つの大きな問題は、資源のリサイクル化であります。地球に存在する資源は有限であり、リサイクルを推進しない限り、廃棄物が増大し地球環境が破壊されてしまいます。

昨年 10 月には再生資源の利用促進に関する法律が施行され、鉄鋼スラグ、石炭灰等が指定副産物にとりあげられております。鉄鋼業はリサイクル産業として、従来この問題に取り組んでまいりましたが、産官学一体となった本会としての対応はこれからと思われまます。研究テーマ公募の主要技術課題には、廃棄物の資源化、スチール缶材の再資源化、一般ゴミ処理技術等の課題が列挙されており、フレッシュな研究テーマがスタートする事を望んでおります。

ところで本会の定款に「鉄および鋼に関する学術、技術そのほか一切の問題を研究調査し我が国における鉄鋼業の振興発達に期することを目的とする」とあるように「学術と技術の結合」、「鉄鋼企業の結合」、「産官学の結合」を理念として中心的な役割を担ってきましたが、近年の技術革新、国際化の流れを先取りして「鉄鋼と他分野の結合」、「国内と海外の結合」を加え、「5つの結合」を基礎に据えております。本会活動はこれらの結合における人と人との交流による技術発展にあります。中でも「学術と技術」、「産官学」の結合は重要であり、我が国鉄鋼業が独自の技術開発を展開してゆく為の要になるものであります。最近の大学や企業を取り巻く社会的、経済的、技術的環境に変化が生じてきており「鉄鋼技術の成熟感」、「金属工学の相対的な魅力低下」、「研究の専門化、深化に伴う工学の理学化傾向」などがそれです。これに伴い本会活動として、人材育成、学術の発展に注力することが必要です。我が国における大学の研究者一人当たりの研究費は欧米諸国の 1/3 弱であり、また大学研究費に占める民間資金の割合は 89 年度で 2.2% と欧米諸国の半分以下の割合になっております。産学共同を果のあるものにするには大学自身の研究を活性化させ研究成果をあげることが必要で、その為には老朽化した研究環境を整備しなければなりません。またこれを恒常的に推進する仕組みが必要です。森田前会長の御尽力により前年度に「大学における鉄鋼研究振興資金」として 5 億円を達成し、その果実をもって大学への研究助成がスタートしていますが、今後さらなる鉄鋼関係の大学での研究に対する支援が必要と思ひます。

このことと関連して 21 世紀に向けての鉄鋼業界にとって優秀な人材の確保が重要な課題であります。期待される人間像は、学習・理解能力も必要ですが、問題発見・解決能力があり、自己主張ができる人の養成が必要で、人材とは能力と人望と識見にあると言えます。その為には企業の役割分担と大学の役割分担とがあり、基本的にベーシックな部分は大学に、応用技術などは企業の役割だと思ひます。システムティックな物の考え方ができる人、ベーシックを基本にして判断力、行動力のある人の養成が大切です。また学生に対して鉄鋼技術にいかにか新しい魅力をもたせるかが必要でありましよう。その為には学術活動の一層の活性化、本会活動の効果に対する期待の増大、若手会員の確保などの対応が挙げられます。本会ではこれらの検討を昨年から発足した「育成委員会」で進めております。会員の皆様の御理解をお願いする次第であります。

本会のもう一つの注力分野は鉄鋼技術の延長上およびその周辺にある境界領域への活動の拡大であります。今年度より「境界領域委員会」が発足し、当面の分野として、チタン、材料電磁プロセッシング、プラズマプロセッシング、複合材料、粉末焼結を中核として考えておりますが、その他の分野についても必要に応じて設置してゆきたいと思ひます。

また国際化については国際会議、シンポジウム等で交流を図っておりますが、世界がグローバル化する中で、一国のみの繁栄が許されるべきではありません。技術的トップレベルに立った今こそ日本の鉄鋼業がリーダーシップを発揮して各国との共生を図り、国際貢献を果たすべきであります。今秋に開催されます IISI の東京総会が成功するよう皆様の御協力をお願い致します。

会員各位もすでに御承知のように本会はその他にも広範囲にわたる活動を展開しており、これまで多くの成果を挙げてきました。森田前会長をはじめ歴代会長、役員、事務局の方々の御労苦には並々ならぬものがあつたことと感謝申し上げますとともに、本会の更なる発展のため、会員の皆様の一層のご支援とご鞭撻をお願い申し上げる次第であります。